

「時代を見分ける」

ルカの福音書 12:54～59

はじめに

近年、天気予報、気象予報技術の精度が上がり、80%以上の確率で的中させることができているそうです。今日の内容はそんな明日の空模様についての話を用いられたイエシュアのたとえから始まっていますが、イエシュアが伝えておられることは単なる明日のことではなく終わりの日、世の終わりの様子、出来事についてであり、その日に成就する神のご計画についてです。この的中率はもちろん 100%であり、それは天気予報っぽくいうならば天地預報です。イエシュアは御父から預かった終わりの日についての天と地の情報を伝えられました。そして今日、それは真理の御霊となられて私たちにそれらを伝えてくださいます。こう言われているとおりです。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。

今日もこの真理の御霊が私たちを導き、これから起こることを伝えてくださいますように。

1. そのとおりになる

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:54 イエスは群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言います。そしてそのとおりになります。

12:55 また南風が吹くと、『暑くなるぞ』と言います。そしてそのとおりになります。

ここでイエシュアは「あなたがたは…と言います」と人々の一般的な知識を取り上げておられます。「西に雲が出るのを見るとすぐに…にわか雨になる」これは西の海、すなわち地中海上空からイスラエルの地に流れて来る雲のことです。地中海からの水蒸気、水分をたっぷり含んだ雲はイスラエルに激しい雨をもたらします。時季としては雨季と呼ばれる 11 月から 3 月の時季を指しています。一方「南風が吹くと…暑くなる」というのは「南」という意味でもあるネゲブの砂漠から吹いてくる熱風です。これは雨のほとんど降らない 4 月から 10 月の乾季を指しています。つまりこの二つの内容はイスラエルの一年の季節の流れを指しており、これらの言葉を用いてイエシュアは季節の移り変わりを見分けるように「今の時代」を見分けることについて



教えようとしておられるのです。そしてイスラエルの雨季と乾季についてのこの二つの事柄は確かに普段人々が互いに言っているものなのですが、文脈的にここまでイエシュアは本当に多くのたとえを語っておられます。この 12 章だけでも少し振り返ってみてください…。そして実にこの後にもまたたとえが、裁判制度を用いたたとえがあります。ですからこの雨季と乾季についての群衆の言葉もまたたとえなのです。正確にはイエシュアが群衆たちの言葉を用い、これをたとえとして話しておられるのです。そしてイエシュアのたとえにはすべて秘められた意味があり、それはすべて「神の国の奥義（ルカ 8:10）」です。ではその奥義を解き明かしてまいりましょう。

① 西に雲が出るとにわか雨になる

「西」はヘブル語でマアラヴ(מערב)といい、日が沈む「夕方」を意味するエレヴ(ערב)がその語源です。イスラエルの日にちの考えは創世記一章にある「夕があり、朝があった。第一日」という御言葉に基づき夕方から日付が変わり、一日が始まります。つまりこの「西」マアラヴは神のご計画の始まりを指し示す言葉なのです。そしてそこに「雲が出るのを見る」とあります。この「雲」はアーヴ(עב)といいます。この初出箇所である出エジプト記 19:9 を見てください。

出エジプト記【新改訳 2017】

19:9 主はモーセに言われた。「見よ。わたしは濃い雲の中であって、あなたに臨む。わたしがあなたに語るとき、民が聞いて、あなたをいつまでも信じるためである。」それからモーセは民のことばを主に告げた。

これはモーセが主の山に上って行った時のものです。主は「濃い雲の中であって、あなたに臨む」つまり主はアーヴの中であって、ご自身がお選びになったモーセのもとに「濃い雲の中であって」降りて来られ、モーセもまた山に上り、この「濃い雲の中であって」主と会いました。このように主は雲に包まれながら天から降られ、人は上り、雲の中で出会うという出来事は、以下の預言を指し示した「型」と言えます。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

イエシュアの空中再臨、教会の携拳とも呼ばれるこの預言の成就が現わされ、そこから「西」に日が沈むかのようにこの世は暗くなり、暗黒の時代すなわち大患難時代が始まるということがこの「西に雲が出るのを見るとすぐに、にわか雨になる」という言葉を用いられたイエシュアのたとえです。ちなみにこの「にわか雨」を意味するゲシエム(גשם)とは本来、かつてこの地上を滅ぼした大洪水を引き起こし、四十日四十夜降り続いた「大雨（創世記 7:12）」を意味する言葉です。イエシュアはこれを「ノアの日」と呼ばれ、「人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです（マタイ 24:37）。」と説いておられます。ですから携拳は大患難時代の引き金、始まりのしるしとして起こることがここにはたとえられ、奥義として表されているのです。

② 南風が吹くと暑くなる

「南」を意味するネゲヴ(נֶגֶב)の初出箇所は以下の記述です。

創世記【新改訳 2017】

12:8 彼は、そこからベテルの東にある山の方に移動して、天幕を張った。西にはベテル、東にはアイがあった。彼は、そこに主のための祭壇を築き、主の御名を呼び求めた。

12:9 アブラムはなおも進んで、ネゲブの方へと旅を続けた。

12:10 その地に飢饉が起こったので、アブラムは、エジプトにしばらく滞在するために下って行った。その地の飢饉が激しかったからである。

これはアブラムが、主が彼に与えられた約束の地を離れ、エジプトに下って行くという出来事です。その理由はネゲブに起こった「飢饉」のためです。このようにネゲヴとは本来、激しい「飢饉」を指し示す名なのです。「主のための祭壇を築き、主の御名を呼び求めた」アブラムの上にこの飢饉が襲いかかりました。世の終わりの大患難は別名を「主のことばを聞くことの飢饉（アモス8:11）」とも呼ばれます。その中でアブラムの子孫であるイスラエルは、獣と呼ばれる反キリストと契約を結んでしまいます。それはまるでここでアブラムがエジプトに下って自分の妻であるサラをファラオに差し出してしまうようなものです。そのように終わりの日にはイスラエルは自分たちの愛する神殿を獣に奪われることとなります。そのようなことが起こるといことが、そのような神のご計画がこのネゲブ「南」という名には秘められているのです。そしてそこに「風が吹く」というのです。「風」はルーアツハ(רוּחַ)、本来は「神の霊」を指す言葉です。そして「吹く」という意味のナーシャヴ(נָשַׁף)は本来、「(死体に群がる猛禽を) 追い払う（創世記 15:11）」という意味の言葉です。終わりの日の大患難という激しい飢饉の中で弱り果てたイスラエルに襲いかかる獣、反キリスト、その姿はまさに死体に群がる猛禽のようです。しかしそれを神である主の霊、イエシュアが再臨され、これをまさにナーシャヴ、追い払うのです。そのような神のご計画がこの「南風が吹く」というたとえには秘められているのです。

そして「南風が吹くと、暑くなるぞ」と言っておられます。この「暑さ」を意味するホーム(חום)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

8:21 主は、その芳ばしい香りをかがれた。そして、心の中で主はこう言われた。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらさしはしない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。

8:22 この地が続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜がやむことはない。」

これは箱舟によって大洪水を生き残ったノアとその家族に対して主が語られたものです。このように「わたしは、再び…生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない」「この地が続くかぎり…やむことはない」という主の地上に対する約束の中の一つとしてこの聖書で最初のホーム「暑さ」があります。ですから「種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜」という区別、すなわち分ける、裁くという神のご計画によって、「この地が続くかぎり」生かすものは永遠に生かし、そして滅ぼすものは永遠に滅ぼす、とい

う主の裁きの御業が成就することがこのホーム「暑くなるぞ」という言葉には秘められているのです。つまり「南風が吹くと、『暑くなるぞ』」とは、アブラハムの子孫イスラエルをみことばの飢饉、大患難の中を通らせ、彼らを欺き、神殿を奪う獣、反キリストをイエシュアが追い払い、救いと滅びの裁きを完了し、地を生かされる、という神のご計画の「型」が、その奥義がここには表されているのです。そしてこれら二つのたといはいずれもイエシュアが「そしてそのとおりになります」と言われているとおり、必ず実現するのです。

2. 時代

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:56 偽善者たちよ。あなたがたは地と空の様子を見分けることを知っていながら、どうして今の時代を見分けようとしないのですか。

そしてこれに次いでイエシュアはなぜ「今の時代を見分け」ようとしな

いのかと問うておられます。この「時代」という意味のエート(ἔτος)は本来、以下のような意味で使われました。

創世記【新改訳 2017】

8:10 それからさらに七日待って、再び鳩を箱舟から放った。

8:11 鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地の上から引いたのを知った。

8:12 さらに、もう七日待って、彼は鳩を放った。鳩はもう彼のところに戻って来なかった。

これもまた「ノアの日」の出来事です。この「夕方になって」正確には「夕方の時に」、という意味で聖書で最初のエートが使われています。そしてそれはノアが放った鳩が「オリーブの若葉」をくわえて彼のもとに帰って来たことを指しています。実はこの出来事もまた終わりの日に起こるイエシュアの空中再臨、教会の携挙を指し示しています。すなわちこの鳩はイエシュアを表し、オリーブの若葉は携挙の際「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられる（I コリント 15:52）」という事実を指しています。このように携挙とはよみがえらされた私たち教会がイエシュアによって天に引き上げられる、天に帰ることですからこの鳩の働きはそれを見事に表しているのです。ちなみにノアはこの後再び鳩を放ちますが「鳩はもう彼のところに戻って来なかった」とあり、これはイエシュアの空中再臨の後に起こる、イスラエルの王なるメシアとして地上を治め続けるために再臨されるイエシュアを指し示していると言えます。このように、「今の時代を見分け」るとはすなわちイエシュアの空中再臨、携挙から始まる終わりの日を知りなさい、覚えなさい、その日が来ることを理解していなさい、ということなのです。

3. 引き渡す

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:57 あなたがたは、何が正しいか、どうして自分で判断しないのですか。

12:58 あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときは、途中でその人と和解するように努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行き、裁判官はあなたを看守に引き渡し、看守はあなたを牢に投げ込みます。

12:59 あなたに言います。最後のレプタを支払うまで、そこから出ることは決してできません。」

「どうして今の時代を見分けようとしらないのですか」と言われたイエシュアは、その言葉を繰り返すかのように「どうして自分で判断しないのですか」と問われ、再びたとえを用いて語られます。つまりこのたとえは「今の時代を見分けようとしらない」者、すなわち携拳されることなく大患難という名の「牢に投げ込」まれるイスラエルの民です。ここで「訴える」という意味で使われているリーヴ(רִיב)は本来「口論、争い」という意味の言葉で、それはアブラハムとロトの争い(創世記 13:7)を指しています。正確には彼らの家畜の牧者同士の争いでしたが、その結果、彼らは分かれて住むようになりました。天に携拳される教会と地上に残されるイスラエル、その事実がこの言葉には指し示されています。しかしこのイスラエルの中から「イスラエルの残りの者」と呼ばれる、反キリストにひざをかかめず、イエシュアをメシアとして信じる、「神の印」を押される神のしもべたちが出てくるのです。ここに「引き渡し」という意味で使われているマーサル(מָרְסַל)の初出箇所を見てください。

民数記【新改訳 2017】

31:4 イスラエルのすべての部族から、部族ごとに千人を戦に送らなければならない。」

31:5 それで、イスラエルの分団から、部族ごとに千人、すなわち、合計一万二千人の、戦のために武装した者たちが選ばれた。

戦いのためにイスラエルの中からマーサル「選ばれた」「一万二千人」の戦士たち、彼らの存在とその数は終わりの日に起こされるヨハネの黙示録に預言された神のしもべたちを指しています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:3 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけぬ。」

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

7:5 ユダ族から一万二千人が印を押され、ルベン族から一万二千人、ガド族から一万二千人、

7:6 アシェル族から一万二千人、ナフタリ族から一万二千人、マナセ族から一万二千人、

7:7 シメオン族から一万二千人、レビ族から一万二千人、イッサカル族から一万二千人、

7:8 ゼブルン族から一万二千人、ヨセフ族から一万二千人、ベニヤミン族から一万二千人が印を押されていた。

この「イスラエルの子らのあらゆる部族」からそれぞれ「一万二千人」ずつ、合計「十四万四千人」の「神のしもべたち」、彼らは「イスラエルの残りの者」とも呼ばれ、大患難の中にあっても生き残り、福音を宣べ伝え、この預言の後に続く以下の者たちを救いに導きます。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそぞ存じます」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。

自らを神とする獣、反キリストが全世界を支配する大患難時代において、主イエシュアを信じることは即死を意味します。ですからこの「大勢の群衆」は獣によって皆殺され、殉教の死を遂げます。しかしそれによって大患難の苦しみから解放され、上記の預言にあるように天の御座に、子羊なるイエシュアのみもとに引き上げられることになるのですから幸いです。しかし一方、彼らに福音を伝えた「神のしもべたち」イスラエルの残りの者、十四万四千人は一人も殺されることも死ぬことも許されず、大患難の終わり、すなわち主イエシュアの地上再臨の時まで、まさに最後まで地上においてその宣教の働きを全うします。それが「最後のレブタを支払うまで、そこから出ることは決してできません」というたとえに秘められたイスラエルの残りの者に対する神のご計画です。

このように、牢に投げ込まれるというイエシュアのこのたとえは、一見厳しい裁き、刑罰を表しているようで、実はイスラエルに対する神の選びと、この民によって成そうとしておられる多くの人々の救いを、そのような神のご計画が秘められた福音、良き知らせと言えるものなのです。連日のニュースを見てみると戦争、災害、犯罪など、世界中が問題だらけで、これから一体どうになってしまうのかと誰もが不安にかられてしまう世の中です。しかし聖書は、そこに秘められた神の国の奥義は、確かに福音、神の国へといたる「御国の福音」を伝えています。今日も真理の御霊によって「これから起こることをあなたがたに伝えて（ヨハネ 16:13）」くださいました。どうかこの神の国の奥義を聞く一人ひとりが、この悪い偽りの情報にあふれた今の時代の中にあっても、この御国の福音にこそ目を留め、その現れの日、すなわち主イエシュアの再び来られる日をただひたすらに求め、待ち望み、また告げ知らせしていくことができますように。主イエシュアの御名によって。